

圏外で心づながる

ネットの先に5

日没が迫る中、静岡県掛川市の「明ヶ島キャンプ場」にランタンの明かりがともる。JR掛川駅から曲がりくねった山道を車で約1時間。スマートフォンの画面には「圏外」の文字が浮かぶ。

昨年11月中旬の週末、立崎直樹さん(41)は、小学5年の次男・仁陽君(11)を連れて千葉市内の自宅を出た。妻と高校2年の長男は別の用事で来られない。初めての男2人旅だ。

満天の星の下、学校のこと、家族の話……。たわいもない会話は1時間ほど続いた。口数の少ない仁陽君は、「うん」「普通」とそっけない。でも、こんなに話したのはいつ以来だろう。父子の会話は普段、1分半続かない。

家では食卓を囲んでいても、それぞれスマホに目を落としたり、テレビを見た。5年生になってスマホを持った仁陽君はオンラインゲームに夢中だ。介護施設

アナログの世界 解放感求め



「携帯圏外」のキャンプ場で、たき火を見つめながら話をする立崎さん親子。スマホ(手前)はカメラ代わりに使った(昨年11月、静岡県掛川市) 富田大介撮影

設の責任者を務める立崎さんもスマホが手放せない。キャンプ中、立崎さんは一度だけ、帰りに立ち寄る飲食店を調べようとスマホを手にしたが、「圏外なんだ」と思い直した。

電波が届かない20時間の非日常。「頭がすっきりした感じがする。日常生活で情報を詰め込んでいたとい

もももこのキャンプ場



は1970年代後半に掛川市が開業した。ピーク時の94年度には2000人超が利用したが、次第に客足は遠のき、利用者が約700人にまで減った2013年度に閉鎖。市の担当者は通信環境の良い便利なキャンプ場に客を奪われたのかもしれない」とみる。

「ないことを、売りにしよう」
星空がよく見えるように電灯は撤去。花火や音楽プレーヤーも禁止し、たき火や川のせせらぎの音を楽しむ環境を整えた。外部との通信手段は、管理棟にある一本の有線電話だけだ。こうして17年4月、あえて「携帯圏外」を前面に出して再スタートを切ると、続々と予約が入った。2年目となる18年シーズンの利用者は前年を上回る1696人。リピーターも多い。山田さんは「どこでもつながるからこそ、パソコン



全国から届いた手紙を整理する文通村代表の保科直樹さん(左)とスタッフ(先月17日、千葉県成田市で)

やスマホから解放されたいという願望が多くの人にあるのでは」と語る。



メールやSNSで瞬時にコミュニケーションが取れる今、ある交流手段が注目されている。文通だ。クリスマス間近の昨年12月中旬、千葉県成田市の文通村代表の保科直樹さん(35)の事務局は、全国から集まった5200通もの手紙であふれかえっていた。会員になると、都道府県ごとに仮住所(たとえば大阪なら「なにわ通り10

0番地」など)が付与される。会報で文通したい相手が見つければ、相手の仮住所とペンネームを記した手紙を事務局に送り、転送してもらおう。個人情報がかすことなく手紙のやり取りが楽しめる仕組みだ。会費は月750〜1000円。09年のサービス開始時に3人だった会員は、今は1400人を超えた。代表の保科直樹さん(35)は「スピードが重視される時代だからこそ、手間をかける文通が見直されている。適度な距離感もいいのだらう」と話す。

福岡県筑紫野市のパート従業員、迫本菜摘さん(26)は20〜50歳の女性5人と文通している。SNSは返信をせかされているように感じることもあり、ちょっと離れてみようと思った。「手紙は相手のことを想像する時間がある」。自宅のポストを開けるのが待ち遠しくなったという。(安田龍郎、内田正樹)

「依存」深刻に

手軽にネットにアクセスできるようになり、SNSやオンラインゲームなどをやめられない「ネット依存」も問題化している。厚生労働省研究班の2017年度の調査では中高生約93万人に依存の疑いがあり、5年前より約40万人増えた。

ネット依存専門外来がある成城墨岡クリニック(東京)の墨岡孝院長は「情報を頭の中で捨選択して定着させるには、ぼーっとする時間が必要。スマホの使いすぎは、そうした時間を奪う」と警鐘を鳴らす。

脱ネット依存を支援する一般社団法人「日本デジタルテトックス協会」の石田国大代表理事は▽スマホを寝室に持ち込まない▽利用時間を記録する機能やアプリを使う——などの対策を勧めている。